福島県立医科大学 学術機関リポジトリ

FUKUSHIMA MEDICAL UNIVERSITY

Title	Clinical Characteristics of Intramucosal Gastric Cancers with Lymphovascular Invasion Resected by Endoscopic Submucosal Dissection(内容・審査結果要旨)
Author(s)	橋本, 陽
Citation	
Issue Date	2022-03-24
URL	http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/1680
Rights	
DOI	
Text Version	none

This document is downloaded at: 2024-04-28T12:13:42Z

Fukushima Medical University

論　文　内　容　要　旨

氏名（しめい）	はしもと　みなみ 橋本　陽
学位論文題名	Clinical Characteristics of Intramucosal Gastric Cancers with Lymphovascular Invasion Resected by Endoscopic Submucosal Dissection （内視鏡的粘膜下層剥離術を施行された脈管侵襲陽性粘膜内胃癌の臨床的特徴）

【背景】早期胃癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術（endoscopic submucosal dissection: ESD）の絶対適応は、リンパ節転移のリスクが 1%未満と推定される病変であり、多くの粘膜内胃癌（「M 癌」と定義する）が該当する。一方、ESD 切除標本の病理学的評価での脈管侵襲（リンパ管侵襲あるいは静脈侵襲）はリンパ節転移のリスク因子であり、M 癌であっても追加外科切除が推奨される。しかし、ESD を施行された脈管侵襲陽性 M 癌のリンパ節転移頻度や予後を含む臨床病理学的特徴は明らかにされていない。【目的】ESD を施行された脈管侵襲陽性 M 癌のリンパ節転移の頻度、臨床病理学的特徴、予後を明らかにすることを目的とした。【方法】2003 年から 2018 年に福島県立医科大学附属病院において ESD を施行された早期胃癌のうち、M 癌と脈管侵襲陽性粘膜下層微小浸潤癌（粘膜下層微小浸潤癌は粘膜筋板から 500㎛ m 未満の浸潤があるもの；「SM1 癌」と定義する）を対象とした。まず、M 癌における脈管侵襲の頻度、ならびにロジスティック回帰分析にて脈管侵襲のリスク因子を検討した。次に、脈管侵襲陽性 M 癌のリンパ節転移の頻度と予後を、脈管侵襲陽性 SM1 癌と比較検討した。リンパ節転移の有無は、追加外科切除施行例では手術検体での評価、経過観察症例では 6-12 か月ごとの CT による画像評価とした。最終経過観察は 2019 年 9 月までとした。

【結果】M 癌 882 例 1,166 病変（脈管侵襲陽性 17 例 17 病変、脈管侵襲陰性 865 例 1,149 病変）、脈管侵襲陽性 SM1 癌 29 患者 29 病変が解析対象となった。M 癌の脈管侵襲頻度は 1.5%（17/1,166）であった。多変量解析にて乳頭状腺癌（pap）が M 癌における脈管侵襲のリスク因子として抽出された（$p < 0.0001$）。なお、脈管侵襲陽性 M 癌は、全例が高齢や併存疾患のために追加外科切除を施行されなかった。リンパ節転移率は、脈管侵襲陽性 M 癌と脈管侵襲陽性 SM1 癌の間で統計学的有意差を認めなかった（0% vs. 6.9%, $p = 0.437$）。追加外科手術をせず経過観察を選択された症例の生存率は、脈管侵襲陽性 M 癌と脈管侵襲陽性 SM1 癌（15 例）の間で統計学的有意差を認めなかった（82.4% vs. 73.3%, $p = 0.573$）。なお、脈管侵襲陽性 M 癌の死亡 3 例は全て他病死であった（経過観察期間中央値 62 か月[範囲：12-147 か月]）。【結論】pap が M 癌における脈管侵襲のリスク因子であった。しかし、脈管侵襲陽性 M 癌例において、リンパ節転移や胃癌死を認めなかった。したがって、ESD を施行した脈管侵襲陽性 M 癌は、経過観察が許容されることが示唆された。

※日本語で記載すること。１２００字以内にまとめること。

学位論文審査結果報告書

令和 4 年 2 月 21 日

大学院医学研究科長　様

下記のとおり学位論文の審査を終了したので報告いたします。

【審査結果要旨】
氏名　　橋本　陽（消化器内科）
学位論文題名　Clinical Characteristics of Intramucosal Gastric Cancers with Lymphovascular Invasion Resected by Endoscopic Submucosal Dissection
（内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）を施行された脈管侵襲陽性粘膜内胃癌の臨床的特徴）

本論文の内容は、早期胃癌に対する ESD 実施例を対象に、脈管侵襲陽性粘膜内癌（M 癌）のリンパ節転移の頻度、臨床病理、予後を明らかにする後方視的観察研究である。その結果、①M 癌 1166 病変のうち、脈管侵襲陽性は 17 病変（1.5%）、②脈管侵襲のリスク因子として多変量解析で乳頭状腺癌（pap）が抽出、③脈管侵襲陽性 M 癌は、高齢などの理由で追加外科切除無しでフォローされたが、全例でリンパ節転移などの胃癌再発は認めなかった（他病死あり）、との結論が導きだされた。
審査会の質疑応答において以下の議論がなされた。①脈管侵襲として、リンパ管侵襲と静脈侵襲の因子の重みの違い、②脈管侵襲陽性 M 癌と MSI-high の関連は、③脈管侵襲の程度（浸潤細胞数など）との相関は、④Pap において high grade と low grade での検討は、⑤フォロー時の CT でのリンパ節転移の診断基準は、⑥フォローアップ脱落例の要因の説明の欠如、⑦eCura score system の記述が不十分、その他論文の誤記などの指摘、議論があった。
上記に関し、申請者は適切に応答し、今後の改善点、方向性を把握し、充分な見識を有すると判断できる。さらに、本論文は雑誌 Digestion において、すでに当専門分野での Peer review を受け、論文として Accept されている。
本臨床研究の研究方法とデータ解析は適切であり、学術的意義を有するとともに、一般臨床に貢献できる内容である。論文内容は、論理的に展開されており、独創性を有し、本学におおける医学専攻（博士課程）の学位論文に値すると評価できる。

論文審査委員　主査　消化管外科学講座　河野浩二
副査　病理病態診断学講座　橋本優子
副査　会津医療センター外科学講座　斎藤拓朗